

隠岐空港の取組

隠岐支庁県土整備局 隠岐空港管理所
技師 洲濱 敦哉

1. はじめに

近年、働き方改革の導入に伴って、全国的に労働環境や職場環境を整備する意識が高まっている。本報では、少ない職員数で 365 日運営を行いつつ、急患搬送など離島空港ならではの業務にも対応する隠岐空港管理所を所属全体で支える体制を構築し、さらに人が行き交う重要なインフラ施設の活性化に取り組んでいる状況を紹介する。

2. 所属全体での支援体制構築

(1) 空港勤務者は平日勤務が少なく業務のやりとりにタイムラグが多い

隠岐空港では 5 名の正規職員がローテーションで 365 日の運営・管理に携わっている。航空機が離発着するのに必要不可欠のランウェイチェック、バードパトロール、気象観測の他に灯火点灯、無線対応、空港監視、記録、電話対応なども同時に対応する必要があり、土日祝日においても 2 名以上が必要なため、平日において 4 人役以上が指定休となる。このため、指定休に担当業務の問い合わせや確認があっても回答等が遅れてしまっている。また、事務所内の情報周知や文書決裁についても指定休の職員がいることで円滑に回らない状況となっており、業務の問い合わせや確認をサービス担当者が代行するにしても処理等に時間を要する要因となっている。

【隠岐空港管理所】 TEL: 08512-2-0703 FAX:08512-2-6250
〒685-0021 島根県隠岐郡隠岐の島町岬町1889-12



航空灯火点灯、無線対応、空港監視、記録および電話対応等で正規職員2名必要

- 航空灯火点灯、無線対応および記録等
- 受話器 (計 5 つ)

図-1 隠岐空港管理所 配置図

(2) 空港勤務者は夜間急患搬送に対応するための心身負担

隠岐の島町においては、隠岐病院から本土の病院へ重症患者を航空機で搬送する場合があります。夜間の航空機による急患搬送時は、病院からの連絡により 10 分以内の出勤を要する。このため当番者は常に携帯電話に応答できるようにしておく必要がある。実際に真夜中や早朝に出勤すると翌日の勤務にも影響し、心身負担を軽減するため休暇を取得したいが、勤務者が少ない土日等は休暇取得も困難となっている。

(3) 空港勤務の担当業務や検査など

上記の業務以外にも訓練や施設管理、車両管理などの業務を正規職員5名で分担している。また、国土交通省航空局が行う定期検査などもそれぞれ分担している業務に対応している状況であり、遂行するために内業等の時間を確保する必要がある。しかし、定期便の離着陸対応でこれらの時間も縛られるのが現状である。

(4) 合庁勤務者は土日であっても在島当番で行動制限される

災害等の緊急時に備えて隠岐地区の勤務者は当番制度で在島しなければならない日がある。給与対象外の日であるが行動制限を強いられている状況であり、緊急事態の発生がなければ休日を無駄に過ごす職員も多くなる。

(5) 土日に在島当番の合庁勤務者が空港支援

空港勤務者の土日勤務を1名(アクシデント対応のため1名は必須)に減ずることができ、平日の指定休みを減らすことができる。また、深夜等に急患搬送で出動した場合も休暇を取得しやすくなる。一方、合庁勤務者は勤務振替により行動制限のない(在島当番でない)日に休むことができる。

(6) OJTで空港勤務に必要なスキルを獲得

合庁勤務者に空港業務を遂行してもらうため、航空灯火操作や滑走路内パトロールとの無線交信などの業務を、マニュアルを元に実際に空港勤務者と一緒に3回程度実地訓練を行い、必要なスキルを身につけるOJT体制を構築した。5月から希望者13名がOJTに参加し、最終日には試験や手続きを行い、空港制限・保安区域立入承認証(通称:ランプパス)を獲得していただいた。

(7) 空港勤務者は土日出勤が減。合庁勤務者は在島当番の無駄な犠牲感を減。

空港職員の勤務指定に併せて、土日や祝日に在島当番である合庁勤務者が空港勤務可能である日を把握し、勤務依頼をするしくみをつくり、7月より実際の勤務指定に反映。空港勤務者は土日出勤が減り、平日勤務が増えることで個別担当業務が滞ることなる執行できることが増えた。一方、支援勤務をした合庁勤務者は在島当番の土日を有意義に過ごせたとの感想が寄せられている。

(8) 支援体制に参加する職員を追加募集

8月下旬に空港勤務者、合庁勤務者の双方にメリットがあり、OJT手法も確立してスムーズに受け入れ体制もとれるとの評価に至った。局長をはじめ関係部長で協議し、9月より支援体制に参加する職員を追加募集し、支援体制の継続がしやすい環境づくりを引き続き取り組んでいる。

3. 隠岐空港の魅力アップ

(1) 変わりばえないイメージ

有人国境離島法により地元住民の搭乗は増えたが、頻繁に利用する者からは、展示、売店、喫茶などに大きな変化がなく、いつ来ても同じだという声が聞かれていた。島外から来る利用者からも展示スペースには古典相撲の柱のほかは、パンフレットのみでパツとした印象がないとの声が聞かれていた。

(2) 支援による余力を空港の魅力アップにも注力

支援体制により空港勤務職員も通常業務以外の取り組みをする余力ができたことから、住民イメージを改善する取り組みをすることにした。これまでにない展示や事業、イベントなどを空港管理所が主体的に企画し、活気ある交通インフラ施設を目指した。

(3) 地元住民の協力を得て希少植物を展示

ジオパークの多様な生態系を代表する植物のひとつとして取り上げられている「ナゴラン」が、チャーター便が多い6～7月に花を咲かせるタイミングであることから、地元愛好家に生体展示協力を依頼した。余裕のあった展示スペースに机などを設置して、解説とともに展示を行い、職員が交代で水やりなどの管理を行うこととし、予算0円事業として実施した。



写真－1 展示スペース場所（植物展示前）

(4) 足を止める人多数、関係会社も含めた職員の意識改革

絶滅危惧種であるナゴランは地元住民にも珍しく、爽やかな香りがするため多くの利用者が足を止めて観賞していた。展示の噂を聞いてわざわざ見に来たという人や花を売店で購入したいという利用者もあった。

空港内の関係会社職員等からも、肯定的な意見が多く、航空会社側からも展示イベント計画の提案があるなど、自らが働く場所の活性化への意欲が感じられた。



写真－2 植物展示を行った様子

(5) 親しみのあるインフラ施設に

隠岐空港では、3年ぶりに「空の日」祭りを今年度10月2日に開催し、約850の方々にご来場いただいた。気象観測業務の説明会場や滑走路ウォーキングなどのイベントを設け、隠岐空港管理所職員でそれぞれを説明したことで、多くの方々に隠岐空港の滑走路に触れていただき、施設や空港業務を知っていただく機会となった。



写真－3 気象観測業務の説明会場の様子



写真－4 滑走路ウォーキングの様子

「山陰中央新報」2022.10.3より引用

(6) おわりに

今回の取り組みは、所属全体の職場環境を改善と隠岐空港の魅力を上げることを目的に行った。コロナ応援もあり、実際に空港勤務した者はまだまだ少ない状況にある。今後の課題としては、職場環境をより改善するため、空港支援の取り組みやメリットを所属全体に周知するなどの工夫が必要あると考えている。

また、職場の環境づくりは今いる職員のためだけでなく、後任の方々のためにもなるため、今後とも取り組んでいきたい。